

第 2 章

インクルーシブ教育システムの理解啓発に向けて 目指したい学校の姿に関する訪問調査

I. 目 的

II. 方 法

III. 結 果 と 考 察

1. 訪問した幼稚園及び学校の聞き取り調査結果

2. 理解啓発に関する結果

3. 考 察

I. 目 的

1. 背 景

本研究では、インクルーシブ教育システムの理解啓発に向けて目指したい学校の姿を検討している。国立特別支援教育総合研究所(2018)は、インクルーシブ教育システムにおいて目指したい学校の姿を提案した。小中学校、合計 15 校の訪問調査結果から、インクルーシブ教育システムの構築において重要であると考えられる内容の抽出と整理を行った。その結果を、以下に示す 7 つの姿として整理した。

1. 管理職のリーダーシップが発揮されている
2. 特別支援教育コーディネーターが機能的に活動している
3. 機能的な校内体制が構築されている
4. 教師間のチームワーク（同僚性）が良好である
5. 子どもに関する情報が収集され活用されている
6. 一人一人の教育的ニーズに応じた支援を行っている
7. わかりやすい授業づくりがなされている

これらの 7 つの姿の関係性を整理したものが図 2－1 である。各学校においてインクルーシブ教育システムの構築を進める上で、「1. 管理職のリーダーシップが発揮されている」と「2. 特別支援教育コーディネーターが機能的に活動している」ことは重要であり必須である。また、1 及び 2 があることで「3. 機能的な校内体制が構築されていること」ことにつながる。これらの 3 つの姿は、体制整備の充実によってインクルーシブ教育システムを構築していく姿である。

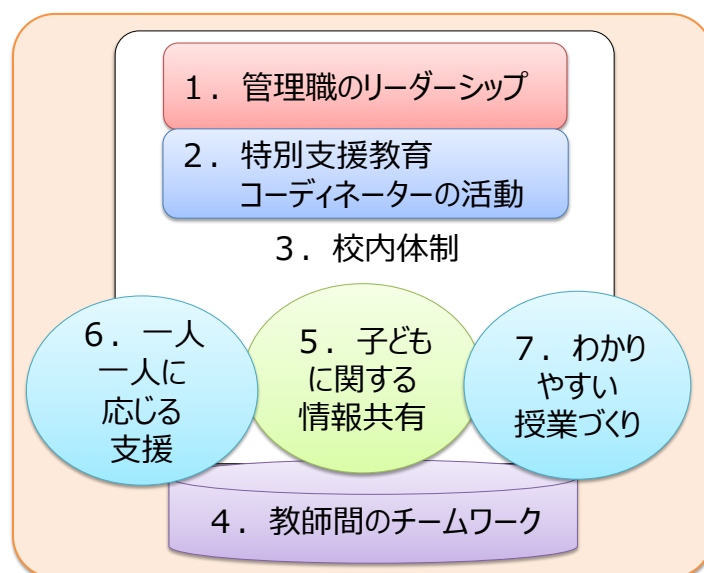


図 2－1 インクルーシブ教育システムにおいて学校が目指したい 7 つの姿の関係

一方、特別支援教育やインクルーシブ教育システムの構築に関して特色ある取組や優れた実践を行っている学校では、共通して「4. 教師間のチームワーク（同僚性）が良好である」ことがわかった。教師間のチームワークが良好であることが「5. 子どもに関する情報が収集され活用されている」ことにつながる。そして、それが「6. 一人一人の教育的ニーズに応じた支援を行っている」ことにつながり、同時に「7. わかりやすい授業づくりがなされている」ことにつながっていた。これらの姿は、教師主体の取組と言えるであろう。また、これらの姿はインクルーシブ教育システムに特化したものではなく、教師の日常の教育活動の基本とも言えるものである。

本研究では、この7つの姿を参考に、新たに、インクルーシブ教育システムの理解啓発の視点で、目ざしたい学校の姿を加えて提案したいと考えた。しかし、これまで、学校におけるインクルーシブ教育システムの理解啓発の実践について検討した研究は見られない。また、本研究所の研究チームの中に通常の学級の教員を経験した者がいないため、通常の学級における理解啓発の実践がイメージできなかった。

そこで、通常の学級において、インクルーシブ教育システムの理解啓発の取組がどのようになされているかを直接知るために、訪問調査によって情報収集することとした。

2 目 的

以下の3点を明らかにすることを目的とする訪問調査を実施した。

- ・学校では、教師に対して、共生社会やインクルーシブ教育システムの理念をどのように伝えているか。
- ・通常の学級の教師は、子どもたちに対して、共生社会やインクルーシブ教育システムの理念をどのように伝えているか。
- ・学校は、保護者や地域の人々に対して、共生社会やインクルーシブ教育システムの理念をどのように伝えているか。

Ⅱ. 方 法

1. 対 象

本研究の指定研究協力地域である8県市の教育委員会に、インクルーシブ教育システムの理解啓発に関して、「うまくいっている」「特色ある取組をしている」と判断される幼稚園、小学校、中学校、高等学校の推薦を依頼した。当初、小学校と中学校での実施を計画していたが、幼稚園及び高等学校についても推薦が可能との教育委員会があり、対象に含めることとした。幼稚園2園、小学校7校、義務教育学校1校、中学校4校、高等学校2校の合計16園・校が推薦され、訪問調査を実施した。これらのうち、幼稚園1園が私立であり、残りの15の幼稚園及び学校は公立であった。

2. 手続き

16 の幼稚園及び学校には、本研究所の研究スタッフ 1 名が訪問し、聞き取り調査を行った。一部の学校には、長期派遣型地域実践研究員が地域の実情を知る目的で同行することがあった。

聞き取りの対象者は、校長または教頭・副校長、特別支援教育コーディネーターを基本とし、学校によっては特別支援学級や通級指導教室担任者が加わった。

訪問は、平成 30 年 10 月から平成 31 年 1 月に実施した。

訪問調査で聞き取った内容は、以下のとおりである。

1. 学校の基本情報（学校規模、特別支援教育に関する取組）等
2. 学校の教職員に対する理解啓発
3. 通常の学級の幼児・児童・生徒に対する理解啓発
4. 保護者に対する理解啓発
5. 地域に対する理解啓発

こうして得た 16 の幼稚園及び学校のデータを、研究チームのメンバー及び長期派遣型地域実践研究員で検討し、幼稚園、小・中・高等学校の通常の学級におけるインクルーシブ教育システムの理解啓発の取組の実際等について情報を整理した。

3. 倫理的配慮

実施に当たり、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の倫理審査を受け許可を得た。調査訪問校には、教育委員会の推薦を受諾することで訪問調査の了承を得るとともに、聞き取り調査の担当者からも調査の趣旨及び目的を説明し、結果の公表に当たっては学校名等が特定されないようにすることを説明した。

調査時間は 1 時間程度とし、園や学校の負担にならないよう配慮した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 訪問した幼稚園及び学校毎の聞き取り調査結果

訪問した 16 の幼稚園及び学校の概要を表 2-1 に示した。また、幼稚園・学校毎の聞き取り調査結果の実際を、23 ページから 38 ページに示した。

表 2－1 訪問した幼稚園・学校の概要

【幼稚園】

- ・ A 幼稚園：子ども同士がかかわりの中で相手について理解したり学んだりすることを大切にしている園
- ・ B 幼稚園：一人一人の子どもを大切にする幼児教育の基本がインクルーシブ教育システムの理解啓発につながっている園

【小学校】

- ・ C 小学校：地域との連携や地域との交流に取り組みながら特別支援教育を推進している学校
- ・ D 小学校：児童への指導場面や実際の姿に基づく特別支援教育の組織的な推進を中核に据えた学校経営を行っている学校
- ・ E 小学校：児童一人一人の多様性を尊重し、インクルーシブ教育システムの実現を目指して取り組む学校
- ・ F 小学校：管理職の強いリーダーシップにより特別支援教育の充実を図っている学校
- ・ G 小学校：児童一人一人を大切に思う「文化」が根付いている学校
- ・ H 小学校：交流及び共同学習の充実と授業のユニバーサルデザイン化を全職員で取り組んでいる学校
- ・ I 小学校：幼小中連絡会、特別支援学校のセンター的機能の活用、巡回指導等により特別支援教育の充実を図り、理解啓発につながる取組を進める学校
- ・ J 義務教育学校：小中一貫校の特色を生かして特別支援教育を推進している学校

【中学校】

- ・ K 中学校：小学校段階からの取組により自然に生徒同士の理解が図られている学校
- ・ L 中学校：多様な学びの場を活用し生徒一人一人の自尊心を尊重した指導や支援を行う学校
- ・ M 中学校：授業のユニバーサルデザイン化に取り組んだことで、生徒理解の考え方が変化し、生徒の行動上の問題が減少した学校
- ・ N 中学校：生徒一人一人の多様性を理解するために、教師の実践を見つめ直そうとする学校

【高等学校】

- ・ O 高等学校：教育的ニーズのある生徒への理解に基づいた指導・支援に取り組んでいる学校
- ・ P 高等学校：特別支援学校と同一敷地というハード面と交流及び共同学習や学校設定教科の充実というソフト面の両面から共生社会の担い手を育てている学校

【A幼稚園】子ども同士がかかわりの中で相手について理解することを大切にしている幼稚園
・ 幼児数：207 名 学級数：9 学級

（１）幼稚園のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・直接的に表現はしていないが、「自分のことが自分でできるようになるためのより良い環境づくりを考えよう！」など自己理解をうながす記述がある。

（２）園児に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室についてどのように伝えているか

- ・幼稚園のため該当せず

②交流及び共同学習の実施

- ・実施していない。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・直接的には伝えていないが、実際に子ども達が自分たちでかかわる中で学んでいく。苦手なことやどんな風にしたいのかを言える環境を作る。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・障害や障害のある人については伝えていない。
- ・盲導犬への募金活動において盲導犬の役割について伝えた。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・子ども同士でケガをすることがあった場合、双方の保護者に伝えることで「子どもってこういうものなんだ」ということで理解を得ている。
- ・特別な支援を必要とする子どもがいるために園生活に支障があると思われたくない。事前に保護者と話し合いを行い、その子にとって一番良い方法を模索している
- ・ボランティアで読み聞かせに来る保護者の方は、子ども達の様子をよく知っている。
- ・おやじの会の活動も活発で、多様な子どもがいることをよく理解してくれている。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・あえて伝えてはいないが、散歩時に地域の人と子ども達が挨拶を交わすことはある。

（５）A幼稚園から学ぶこと

本園では、教師がチームとなって子ども達とかかわっていた。様々な子どもが在籍しているので、特別な支援を必要とする子どもとしては考えていない。日々の保育において課題となることを職員間で自由に話し合える体制を整えている。また、子ども同士が実際のかかわり中で、相手について理解したり、学んだりする機会を大切にしている。その他にも、自ら苦手なことを言えたり、どのようにしたいのかを言えたりできる環境作りを行っている。

【B 幼稚園】一人一人の子どもを大切にする幼児教育の基本がインクルーシブ教育システムの理解啓発につながっている幼稚園

・ 幼児数：54 名 学級数：2 学級、通級指導教室（市単独事業による）

（１）幼稚園のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・ 特別支援教育やインクルーシブ教育システムという表現は使っていない。幼児教育の基本である「一人一人の子どもを大切にする」という考え方を記している。

（２）園児に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室についてどのように伝えているか

- ・ 通級は楽しいところであり、おもちゃがたくさんあって、楽しい先生がいるところ。「ぼくも、私も、いきたいところだ」という意識を持ってもらえるようにしている。

②交流及び共同学習の実施

- ・ 障害児通園施設や特別支援学校幼稚部（肢体不自由、視覚障害）から希望があり、同学年の幼児と、保護者同伴で交流している。希望があれば、すべて実施している。
- ・ 本園の保護者も、交流及び共同学習の実施には前向きである。
- ・ 同じ小学校区の子どもとの交流を大切にしている。

③特別な支援を必要とする子どもについてどのように伝えているか

- ・ 特別なことはしていないが、日々の保育の中で「なんで〇〇さんはこうなの？」という幼児からの質問に適切に答えることが大切である。例えば、発作のある子どもがヘッドギアを使うのは、命を守るためなのだとすることを日頃から伝えている。
- ・ 教師のかかわりを他児が見ている。教師のやったとおりに、他児がかかわる。特別な支援を必要とする子どもであっても、「いけないことはいけないのだ」ということも含めて伝えている。
- ・ 全園児が大切にしてもらっている実感があること前提として重要である。

④障害や障害のある人についてどのように伝えているか

- ・ 特別なことはしていないが、日々の生活の中で、また、園外保育等で、気付きの機会がある。例えば、車いすに乗っている人や、電車の中でつらそうにしている人を見かけた時、話題にしている。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・ 就園時に、全保護者に「特別支援教育にかかる就園時教育相談のご案内」を配付、必要に応じて、園長または特別支援教育課との面談を行うとしている。
- ・ 通級は、だれでも使えるものだということを伝える。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・ 地域に対して、園を開くことが大切である。行事等で、地域の人に見てもらう。
- ・ ボランティアの方が、子どもの様子を見てくれていて、変化を喜んでくれる。
- ・ 学校評議員には、入園式の混乱した様子から、卒園式までの変化を見てもらうようにしている。

（５）Ｂ幼稚園から学ぶこと

一人一人の子どもを丁寧に見取り、適当な環境を整え、必要なかわりをしていくことが、幼稚園教育の基本であり、本園はその基本を忠実に実行することで、特別な支援を必要とする子どもも安心して生活することができている。理解啓発として特別なことはしていないが、教師の姿が子どもたちに影響を与えることを意識しており、日々の保育そのものが、周囲の幼児に対する啓発となっている。また、園を地域に開くことによって、特別な支援が必要な子どもの姿や支援の実際が、地域の人々に理解されている。

【Ｃ小学校】地域との連携や地域との交流に取り組みながら特別支援教育を推進している学校

・児童数：300 名 ・学級数：通常の学級 14、特別支援学級 3

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・中期経営目標の１つとして、「信頼と共同体制の確立」を掲げている。
- ・短期経営目標１として「通常の学級に在籍する学習面や行動面で著しく困難さがある子どもに必要な支援（二次的支援）を行う過程で、支援教室の導入や運営の必要性を保護者や地域はもちろん、教職員にも理解してもらい、連携した対応（指導や体制）の充実を目指す。」としている。

（２）通常の学級の児童に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室についてどのように伝えているか

- ・支援学級の子どもの理解と関連させて、４～６年生には学級活動や総合的な学習の時間で「それぞれが頑張りやすいところで頑張ればよい」という話をしている。

②交流及び共同学習の実施

- ・特別支援学級の子どもとの交流及び共同学習を実施している。授業については特別支援教育コーディネーターが説明をしている。交流及び共同学習では、交流級で音楽や図工を一緒におこなっている。通常の学級で学びが困難な場合には支援員（２名）のサポートで個別に指導を実施している。

③特別な支援を必要とする子どもについてどのように伝えているか

- ・頭で理解するだけでなく、活動を通してどのように接するかという経験が、大切だと考えている。得意なことと不得意なことを伝えるようにしている。中学校との連携も視野に入れて実施している。

④障害や障害のある人についてどのように伝えているか

- ・特に取り組んでいない

（３）保護者に対する理解啓発

- ・特別支援教育では、子どもの社会化を目指していることを伝えている。通常の学級と別の場で学ぶかどうかは方法であって、大切なのは必要な力を身に付けること。力がつけば通常の学級に移ることも可能であることを保護者には伝えている。それでも、

最終的に取り出しをすることが難しいケースもある。

- ・保護者を対象に特別支援教育について説明をしたり、困ったら学校で相談を受けたりしていることを伝える会を計画したところ、想像以上に保護者が集まり、困っている親がいることが分かった。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・教師が地域に入り込むようにして学校の情報を伝えている。例えば、分担して全地区の祭に参加している。また、学校を知ってもらうために学校に来てもらい、周囲の人に口コミで広めてもらうように画策をしている。
- ・社会福祉協議会に依頼して、高齢者の方に学校に来てもらった。移動手段の確保が課題であるが、地域の人に見てもらうのが一番だと考え、いつでも公開している。学校公開も地域住民に多様な子どもがいることを知ってもらう機会だと考えている。

（５）Ｃ小学校から学ぶこと

村内のすべての子どもが集まる学校である。地域には支援の必要な状況を隠す文化があるが、保護者の不安や中学校への連携などを考え、早期より子ども園と連携し、子ども理解と支援の共有に取り組んでいる。また、教育的ニーズはあるが支援の必要性を認められない保護者がいること、学力全体の低さが課題であることをふまえ、全児童を対象として、学力の向上を目標に特別支援の観点を取り入れた授業づくりや学級づくりに全校で取り組んでいる。また、教員が地域に積極的に参加し学校に理解を求める姿勢は開かれた学校づくりに大切な取組と言える。

【D小学校】児童への指導場面や実際の姿に基づく特別支援教育の組織的な推進を中核に据えた学校経営を行っている学校

- ・児童数：292名・学級数：通常の学級12、特別支援学級3、通級指導教室1

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・校長は、グランドデザインで示した「経営の重点」に「特別支援教育の充実」を位置付け、特別支援教育の組織的な推進を意識した学校経営に取り組んでいる。
- ・その内容は、「個々の実態を把握し、それぞれのニーズに対応した教育課程の編成や学習計画を立案し、学習内容の充実を図る。」である。
- ・また、その下位項目として、以下を示している。
 - ・全教職員の共通理解の下、それぞれに応じた指導の充実
 - ・校内就学支援委員会等で情報を交換し、具体的な支援の在り方を検討
 - ・校内就学支援委員会や特別支援教育校内委員会の充実
 - ・近隣の特別支援学校との連携により子どもへの理解を深め、指導方法を改善充実

（２）通常の学級の児童に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・同じ地域に育つ児童同士であり、そもそも顔見知りであることに加え、交流及び共同学習を通じて自然に理解している。
- ・特別な支援が必要な児童が同じ課題をクリアできないでいる際に、低学年では、児童から「どうしてできないのか」などと尋ねてくることがある。その都度、人には様々な苦手なことがあるということについて伝えている。中学年以降になると、そういった質問はほとんどなくなる。

②交流及び共同学習の実施

- ・特別支援学級の児童については、行事はもとより、実態に応じて日常的に通常の学級との交流及び共同学習を行っている。
- ・近隣の特別支援学校との学校間交流（年間2回）を行っており、4月に職員の間合合わせと打合せを行っている。近隣の特別支援学校小学部の教室には、本校の児童の写真が掲示されているなど、互いの理解が進んでいる。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・特別な支援を必要とする子どもに限らず、「ゆっくりわかること」「できないこと」は恥ずかしいことではない、得意・不得意は誰にもある、といったことを伝えている。

④通常の学級において、障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・発達段階を踏まえ、4年生で、隣接する高齢者施設の職員による障害の疑似体験（車椅子、白杖）を行っている。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・入学説明会において、特別支援学級があることや、通常の学級に在籍する児童についても必要に応じて相談にのるといったことについて、保護者に周知している。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・特に行っていない。

（５）Ｄ小学校から学ぶこと

本校は、地域とのつながりが強い地域に設置されている学校である。そのため、児童同士は、入学前から互いに顔見知りであることに加え、日常的な交流及び共同学習により、共に学習活動に参加するという経験を重ねており、自然な関係が構築されている。また、学校として、特別支援教育推進に関わる業務が分掌に位置付いてことに加え、授業研究を柱に据えた学校経営により、特別支援教育が実際の場面で自然に進められている。本校からは、特別支援教育という「形」から入るのではなく、児童の実際の「姿」から入ることによって、教員や児童の理解啓発が自然に促進されている。

【E小学校】児童一人一人の多様性を尊重し、インクルーシブ教育システムの実現を目指して
取り組む学校

・児童数：413名 学級数：通常の学級 13、特別支援学級 2、通級指導教室 1

(1) 学校のグランドデザインにおける特別支援教育課の記載

- ・特性を踏まえた指導方法の工夫・改善、交流及び共同学習の充実、特別支援教育委員会の開催、幼稚園・保育所、小・中・高等学校との連携等を記載している。

(2) 通常の学級の児童・生徒に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・年度当初に5から10分ほど、特別支援教育コーディネーターから、通級による指導や特別支援学級について通常の学級の子ども達に説明する時間を設けている。
- ・各学級担任から、交流及び共同学習が始まるときに、特別な支援を必要とする子どもの好きなことや苦手なことについて、伝えている。
- ・特別な支援を必要とする子どもをからかうようなことがあったら、からかった子を呼び出して指導する。例えば、特別支援学級の児童のまねをしていた児童を呼び出し、特別支援学級に謝罪しにいつてもらった。その際、特別支援学級の教師から、まねをされた子は、苦手なこともあるけど、こんなこともできるんだよ。」と言われて、それ以降、その子はまねをすることはなくなった。

②交流及び共同学習の実施

- ・特別支援学級と実施している。特別支援学級、通常の学級の双方にねらいがある。

<特別支援学級>

- ・通常の学級の児童・教職員や近隣校の特別支援学級の児童と触れ合い、活動することにより、互いに協力し合って活動することの楽しさを味わわせる。また、バランスのとれた人間形成や集団活動への適応能力を育む。
- ・経験の拡大をはかりながら、能力に応じた学習ができるようにする。

<通常の学級の児童のねらい>

- ・特別支援学級の児童とかかわることにより、様々な障害のある友達がいることを知り、仲間として受容する態度や思いやりのある豊かな心情を育てる。
- ・特別支援学級の児童も学級、学校の一員であることに気づき、共に協力して生活しようとする態度を育てる。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・通級による指導については、担当者が最初に子どもを迎えに行ったときに5から10分ほど説明をしている。低学年の児童からは、「僕も行きたい。」と言われる。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・特別支援教育コーディネーターが、絵本「てるちゃんのかお」を使って、障害理解の話をしている。
- ・「みんなちがってみんないい」の活動（障害理解）を通して、それぞれの人が得意なこと、不得意なことがあり、不得意なことへの配慮は特別なものではないことを伝えている。

(3) 保護者に対する理解啓発

- ・「特別支援コーディネーターだより」を発行して、理解啓発を図っている。

(4) 地域の方々に対する理解啓発

- ・手をつなぐ育成会の通信を配布している。
- ・13台のスクールバスを運行しているが、そのバスを見守るボランティアから子ども達の様子を聞くこともある。

(5) E小学校から学ぶこと

児童の多様性を尊重し、「みんなちがってみんないい」の活動を通して、それぞれの児童には、得意なこと、不得意なことがあり、不得意なことへの配慮は特別なものではないことを伝えている。障害のある・なしに関わらず、児童一人一人が誰でも得意なこと、不得意なことがあることを理解してもらう取組や、児童の特性を踏まえた指導方法の工夫・改善への取組について学ぶことができた。

【F小学校】管理職のリーダーシップにより特別支援教育の充実を図っている学校

- ・児童数：84名
- ・学級数：通常の学級6、特別支援学級2

(1) 学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・学校教育全般、または、全教員で、特別な教育的ニーズのある子どもを支援するシステムを目指している。

(2) 通常の学級の児童生徒に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・いつも明確に伝えているわけではないが、特別支援学級については「みんなと違った方法でじっくりと勉強をするクラス」、通級指導教室については「一部の学習について、じっくりと勉強をするために利用するクラス」と話している。

②交流及び共同学習の実施

- ・特別支援学校との居住地校交流として、本校学区に居住している5年生の児童1名が実施（同学年）している。児童が活動の内容を考えて一緒に取り組む。

③特別な支援を必要とする子どもについてどのように伝えているか

- ・下記の④と共に実施。

④障害や障害のある人についてどのように伝えているか

- ・人権教育を基本として、各教科領域及び学校行事等において指導している。お互いを認め合う学級経営の中で、皆が所属感を高めることができるよう、個別的な配慮が必要であることを繰り返し指導。
- ・人権作文に全児童が取り組む
- ・「道徳」「道徳教育」で指導

- ・ 4年生の総合的な学習の時間の中で「福祉」について学習し、障害や障害者への理解を深める。地域には、老人ホーム、ディサービス、社会福祉協議会等の資源があり、地域に合った学習内容であると感じている。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・ 学年だより、学校だより、人権教育だより、ホームページで啓発している。
- ・ 学年PTAの中で保護者と児童と一緒に体験する参加型活動を取り入れている。

（４）地域の方に対する理解啓発

- ・ 学校だよりを地域へ配布したり、ホームページで啓発したりしている。

（５）F小学校から学ぶこと

本校は、全校児童84名の小規模校であり、そのうちの10名が特別支援学級に在籍している。小規模校ならではの特性を生かし、教職員は、常日頃から密に連携・協力しあっている。これは、児童一人一人のニーズへの丁寧、かつ柔軟な対応を可能にしている。また、校長・教頭等の管理職の強いリーダーシップのもと、障害の有無にかかわらず、児童が学び合えるような風土が醸成されている。学校や地域の特色を生かし、児童がかかわりの中で、お互いを理解し合えるような活動も積極的に導入されている。

【G小学校】児童一人一人を大切に思う「文化」が根付いている学校

・ 児童数：470名・学級数：通常の学級17、特別支援学級2、通級指導教室1

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・ 「特別支援教育」という表現は使用していないが、特別な支援を必要とする子どもも含め、すべての子どもを大切にするという理念が表現されている。

（２）通常の学級の児童に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・ 特に伝えていないが、教員が一人一人の児童を大切にし、児童同士もお互いを大切にするという素地があるため、特別支援学級の児童とのかかわりも大切にしている。

②交流及び共同学習の実施

- ・ 特別支援学校に在籍している児童が、副次的な籍を利用しているので、本校の学校行事に参加することで交流している。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・ 特に伝えていない。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・ 特に伝えていない。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・通常の学級の中で特別な支援を必要とする児童について、保護者の理解が課題となっている。そのような保護者に対しては、担任が話をするより、特別支援教育コーディネーターが専門的な立場から話をする方が保護者の理解も深まっている。
- ・保護者には「障害」や「特別支援教育」としての話ではなく、児童本人が困っていることを伝えるようにしている。特別支援教育ありきではなく、保護者と一緒に児童の困難さについて考える姿勢で取り組んでいる。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・音楽の授業や習字の授業では、地域の方々にボランティア講師を担当していただいていることで、児童について知ってもらう機会になっている。

（５）G小学校から学ぶこと

本校は、山と緑に囲まれた場所に位置し、地域が古くから培ってきた穏やかな雰囲気は、一人一人の児童を大切にするという学校文化に色濃く反映されている。また、特別支援教育の取組としてではなく、困っている児童を大切にするという理念のもと、教員をはじめ、児童同士が日々かかわり合っている。さらに、学校は地域に開かれ、住民がボランティアとして授業に参加することで、児童の成長を見守る機会となっている。

今後、少子高齢化による児童数の減少や児童の実態の多様化、教員の入れ替わり等により、地域の環境が急速に変化していくことが予想される中で、本校の特色を明文化し、校内全体で具体的な取組に発展させることで、保護者や地域にも発信していくことが可能になると考えられる。

【H小学校】交流及び共同学習の充実と授業のユニバーサルデザイン化に全職員で取り組んでいる学校

・児童数：1,037名 ・学級数：通常の学級31、特別支援学級2

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・教育目標に「豊かな心をもち学び合い鍛え合う児童の育成一個のよさを発揮し、仲間との関わり合いで伸びていく子」、信頼される学校作りに「一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細やかな教育的の推進」や「授業のユニバーサルデザイン化」を設定した。

（２）通常の学級の児童に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・通級の学級の児童から、自分で友達に言ってもよいのではという（6年生）。
- ・仲のよい子には、言っているらしい。3年生は、言っている児童がいる。
- ・4月は不安かもしれないが、担任として、恥ずかしいことではないので、今は、受け

止められると考え伝えたい（本人が葛藤、保護者は言ってもいいという場合もあるため伝えてはいない）。

- ・「これから、苦手なことを違う部屋で勉強するよ」と伝える（保護者からも要望）。
- ・通常の学級の児童に対して、この授業は、特別支援学級の児童もこの学級で授業を受けると説明し、「来た時は、困っていたら助けてね。」と伝える。

②交流及び共同学習の実施

- ・特別支援学級の児童は一人一人の特性を考え、めあてを持って交流に参加している。
- ・子どもによって交流に行く教科、内容等を考え、交流学級の友達と学習する機会を設ける。
- ・児童によって特別支援教育支援員や担任が交流についていく場合もあるが、交流学級の担任が責任を持ってみる場合もある。
- ・希望される学年で実施している。1年を通して同じ学級で実施している。
- ・交流学級の課題を聞いて覚えてくる。例えば、ワークシートを書くことを覚え、続きを支援学級で行う。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・オープンスクール等で他の保護者から聞かれることもあるが言える範囲で伝える。
- ・伝える際、関連機関に相談して伝え方を考えることもある。
- ・保護者と相談し、学級の子どもたちに話すことについて了承を取り、担任から相談を受けて、直接言わずに間接的な題材を取り上げて伝える。
- ・本人が自己理解できていないこともあるため、間違ったことを伝えないようにしている。服薬も保護者次第で、わかっている児童もいる。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・総合的な学習の時間を使い、小学校で1度は学ぶ機会を設定している。
- ・道徳科、教科書の題材などに設定された内容

（３）保護者に対する理解啓発

- ・新1年生の入学説明会で、特別支援教育について、特別支援学級の様子や学校の支援体制について説明している。
- ・話題になれば、状況に合わせて伝える。個人の取組ではなく学校として取り組んでいること、対応していることを伝えている。
- ・学校便りに、支援学級の様子を掲載
- ・教育相談等で、個別に話をする。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・音楽会に特別支援学級の発表の場を設けている
- ・老人会が、小学校で、昔の遊びを伝える機会がある
- ・総合的な学習の時間に福祉施設を学習の場とすることがある

（５）H小学校から学ぶこと

交流および共同学習を通して児童の障害を伝える手続きを検討し実践している学校で

ある。学年による児童の実態により、障害を伝える方法は異なることに着目し個別に丁寧に実施している。また、授業のユニバーサルデザイン化に取り組むとともに、1つの学級で起こった課題を全職員で共有し、改善に取り組んでいる点に特色がある。

【Ⅰ小学校】幼小中連絡会、特別支援学校のセンター的機能の活用、巡回指導等により特別支援教育の充実を図り、理解啓発につながる取組を進める学校
・児童数：47名　・学級数：通常の学級4（一部複式）、特別支援学級1

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・「学校経営の重点」の中に、「授業のユニバーサルデザイン化、学び合いを大切にした授業」を掲げている。

（２）通常の学級の児童に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・児童に直接は何も伝えていない（保護者の要望も）。
- ・特別支援学級の児童は、「国語、算数、自立活動」以外は、給食等も含めて交流学級で学習している。休み時間には、校長と一緒に遊んでいることも多い。

②交流及び共同学習の実施

- ・交流及び共同学習を意識して実施していない。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・在籍する吃音の児童について、学級活動の時間を利用して、担任がすべての学級で障害や対応について話をした。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・人権に関する授業の中で話している。
- ・障害についての「理解学習」は大事だと思うが、教員の理解が十分でないと難しいのではないか。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・人権に関する研修の中で、障害についても少しだけ話した。PTA研修会等の機会を利用して、話題にした方がよいと思っている。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・特に伝えていない。

（５）Ⅰ小学校から学ぶこと

管理職会や合同研修会の実施等、隣接する幼稚園との連携を図ることにより、1年生から個別の指導計画が策定され活用されている。

県の教育センターの出前講座を活用することにより、教員の意識が、担当する子どもで

はなくても「全員でみよう、考えよう」と変わってきており、インクルーシブ教育システム構築を組織的に進めていこうとしていると考えられる。

【J 義務教育学校】 小中一貫校の特色を生かして特別支援教育を推進している学校

・児童生徒数：594 名 ・学級数：通常の学級 12、特別支援学級 2、通級指導教室 2

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・教育活動の中に、特別な支援を必要とする子どもたちへの対応の共通理解・協働対応について記載している。

（２）通常の学級の児童に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・子どもたちに「〇〇障害」とは伝えていないが、得意なところと苦手なところが一人一人違うことや、静かな環境で勉強すると分かる子もいることを伝えている。

②交流及び共同学習の実施

- ・校内の特別支援学級と通常の学級との交流及び共同学習を行っている。できるだけ一緒に勉強できる場を設けられるように配慮して、教育課程を組んでいる。
- ・教育支援連絡会議において、どの学級に支援員が入れば交流及び共同学習が実施できるかについて協議している。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・入学時から一人一人が違うということを学んでいる。
- ・クラス替えがあった場合には、具体的に困っていることや、どのように声かけするとよいかを教えている。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・町が独自に設定した教科（道徳、総合的な学習の時間、学級活動を融合した教科）において、視覚障害や聴覚障害のある方に対し、どんな手伝いができるか等について、子どもたちに話合わせている（４年生）。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・「学校だより」で、小中一貫校のシステムについて周知している。
- ・個別の教育支援計画の合意形成に当たり、教育委員会が検査結果から把握した子どもの特性を説明したり、学校が校内での子どもの様子やどのような支援を提供可能であるか等を説明したりしている。保護者には、個別の教育支援計画の活用などの理解・啓発を促していく必要があると感じている。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・町の広報にて、町民全員に対し、日本の教育が変わってきていること、J 義務教育学校が全国に先駆けて実施するインクルーシブ教育システムについて周知した。
- ・子どもが地域に出かけていき、地域と触れ合う中で、インクルーシブ教育システムへ

の理解が深まっていくことが重要であると考えている。

（５）Ｊ義務教育学校から学ぶこと

本校では、小中一貫学習の中で、どの子も大切にしたい分かりやすい学びの保障や、地域が独自に設定した教科の中で、特別な支援を必要とする子どもと周りの子どもが相互理解を深める取組が行われている。また、特別支援学級と通常の学級の交流及び共同学習も積極的に行われており、どのような支援体制を構築すれば、交流及び共同学習の機会をより多く設定することができるか、協議されている。こうした取組の基盤となっているのが、学部を超えた連絡会議である。

【Ｋ中学校】小学校段階の取組により自然に生徒同士の理解が図られている学校

・生徒数：317名　・学級数：通常の学級10、特別支援学級3

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・学校全体の経営方針には、特別支援教育にかかわる言葉が明記されているわけではないが、それぞれの学級経営計画の中に、特別支援教育の視点が入っている。

（２）通常の学級の生徒に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・生徒は入学前から互いのことを知っている地域であり、特別支援学級在籍生徒や通級指導教室利用生徒に関する理解が図られていることから、中学校に入ってから特に取り立てて何か特別な扱いをする必要はないと考えている。生徒同士もごく自然に接しているようである。

②交流及び共同学習の実施

- ・知的障害特別支援学級については、専門教科を中心に、通常の学級と交流及び共同学習を実施している。
- ・自閉症・情緒障害学級については、学活や道徳など週当たり4時間程度を特別支援学級で学習し、それ以外は、通常の学級で学習をしている。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・特に伝えていない。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・特に伝えていない。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・特に伝えていない。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・特に伝えていない。

（５）Ｋ中学校から学ぶこと

本校は、地域とのつながりが強い地域に設置されている学校である。生徒同士が、入学前から互いに顔見知りであることに加え、小学校での取組により、生徒同士の理解が自然に図られている。本校からは、１校種だけではなく、地域における学校段階等間の継続的な取組が特別支援教育の理解啓発の側面からも重要である。

【Ｌ中学校】多様な学びの場を活用し生徒一人一人の自尊心を尊重した指導や支援を行う学校
・生徒数：１７４名・学級数：通常の学級６、特別支援教室２、通級指導教室１

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・Ｌ中プランの中に、特別支援教育、通級による指導の充実を掲げている。
- ・特別支援教育計画を作成している。

（２）通常の学級の生徒に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・各学級担任から、子ども達の好きなことや苦手なことについて伝えている。
- ・特別支援学級の学級開きのタイミングで伝える。
- ・すでに小学校時代からの付き合いが長いので、子ども達も特別な支援を必要とする子どもやその教育について知っている。
- ・特別支援学級や通級による指導を受ける子ども達だけではなく、各教科等の小テストで残念な結果の子ども達に対しても、放課後指導や再テスト等をしているため、特別な支援を必要とする子ども達だけが支援を受けているというふうには生徒は思っていない。自分たちへの支援と同じと思っている。

②交流及び共同学習の実施

- ・特別支援学級の生徒に関しては、交流及び共同学習で、教科によっては、通常の学級の生徒と共に学んでいる。（一人一人によって違う。）
- ・特別支援学校の子供達とは、居住地校学習を行っている。今年度は、特別支援学校中学部１年生の生徒２名が、Ｌ中学校の知的障害特別支援学級の生徒や中学１年生の生徒と交流及び共同学習を実施した。
- ・交流及び共同学習の企画に参画したい生徒を中１の各クラスから募集したところ、２０名の生徒から応募があった。その生徒たちで自主的に考えて内容を決定した。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・各学級担任から、子ども達の好きなことや苦手なことについて、伝えている。
- ・授業でヒントカードを使いたい生徒がいたら、生徒全員に向かって使っても良いことを伝える。（特定の生徒に特化したやり方はしない。特別な支援を必要とする生徒の自尊感情を傷つけるようなことはしない。）

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか。

- ・研修等で学んだユニバーサルデザインの視点から、障害のある子どもだけでなく、誰

でも苦手なものがあることを伝えている。それに対しての支援も行っている。

- ・教頭、特別支援教育コーディネーターのそれぞれの立場からも機会をみて伝えている。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・学校日より等で、いつでも相談してほしいと伝えている。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・地区の全戸に広報誌を配布し、手をつなぐ育成会の活動に賛助してくれる会員を募集している。地域の７割の方が賛同してくれている。事務局は、各学校で持ち回り。集まった費用は、各学校に分配されて、そこから、特別な支援を必要とする子どもの教育に必要な教材等購入している。

（５）Ｌ中学校から学ぶこと

本校では、通常の学級や通級による指導、特別支援学級等の多様な学びの場を活用し、支援を必要とする生徒一人一人の自尊心を高める指導や支援を行っている。また、ユニバーサルデザインの視点から、生徒全員が授業等を理解しやすいように工夫している。障害のある生徒だけでなく誰にでも苦手なものがあることを生徒に理解してもらいながら、授業を進めているところが本校から学ぶことである。

【M中学校】授業のユニバーサルデザイン化に取り組んだことで生徒理解の考え方が変化し
生徒の行動上の問題が減少した学校

- ・生徒数：410名　・学級数：通常の学級 12、特別支援学級 2

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・校訓「自立　敬愛　創造」に掲げている、「敬愛」には、お互いの生命、人格を敬い、支え合い、高め合うことを意味している。
- ・学校経営方針の、特色ある教育活動では、「分かりやすく参加しやすい授業のユニバーサルデザイン化推進」を取り入れ、重点課題では、「特別支援、人権教育の視点を大切に、授業のユニバーサルデザイン化の推進・定着を図る工夫・改善を重ね、個々の課題にも自ら進んで取り組む「学ぶ力」の育成を図る」ことを取り入れている。
- ・入学式での生徒代表の言葉に、『敬愛』を大事にし・・・」が含まれることあり、生徒へも浸透していると感じている。

（２）通常の学級の生徒に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・１年生で福祉体験学習、特別支援学校との交流（現在希望者がたくさんいる）。
- ・『ポメラ』を使用して、作文のワープロ打ちを認めている生徒がいる（小学校から引

き継ぎ、生徒指導部が小学校を見た際も使っていた)。この生徒については、クラスで説明をしている。

- ・担任がホームルームで伝えた。以前はトラブルがあった生徒で、うまくいっていないことを生徒が既に理解していた。
- ・生徒の行動の理由等について保護者と文書を作成し読み上げた。

②交流及び共同学習の実施

- ・特別支援学校と、交流の研究事業を秋に1回ずつ実施した。
- ・生徒によるが、給食、音楽、体育、全ての授業、朝の学活等を利用して実施している。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・保護者の離婚により、名字が変わる。突然、水曜日から変わることがある。家庭の中でいろいろあること、苦手なことがあることを知っていることが多い。
- ・学年が上がるごとに理解できる。
- ・特別支援教育というより、外国につながりのある生徒が在籍しているが、生徒同士が「直球で話せる」環境にある。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・道徳、社会、教科等で取り扱う内容における障害理解
- ・家庭科で、高齢の人がいる、赤ちゃんがいるなどの前提で間取りを考える。

(3) 保護者に対する理解啓発

- ・保護者・地域に対して、学校便り、参観日のPTA全体会、オープンスクールで伝えている。内容は、特別支援教育というよりも、ユニバーサルデザインの視点に関するものである。

(4) 地域の方々に対する理解啓発

- ・特に実施していない。

(5) M中学校から学ぶこと

行動上の問題のある生徒が多いことに課題意識を持っていた教員がユニバーサルデザインに関する研修を受けたことで、生徒理解の考え方が変化し、行動上の問題が減少した。生徒同士はお互いのことをよく知っている環境と考えられるが、ユニバーサルデザイン事業中心の取組のため、教員のかかわり方に加え、生徒や保護者、地域に対して共生社会に向けた中学校としての情報発信を検討し、理解啓発に向けて取り組んでいくことが考えられる。

【N中学校】生徒一人一人の多様性を理解するために、教師の実践を見つめ直そうとする学校

・生徒数：317名 ・学級数：通常の学級11、特別支援学級2

(1) 学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・学校の基盤として、子どもが安心して学べる学校を目指し、特別支援教育にかかわる

内容では、インクルーシブ教育のスタンダード化や、学習環境のユニバーサルデザイン化についてを明記している。

（２）通常の学級の生徒に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・特別支援学級在籍生徒の実態について、年度始めの集会で、特別支援学級主任の教員が話題提供し、教員間で情報共有している。
- ・特別支援学級主任の教員は、教員間の理解をより深めるために、特別支援教育に関する話をする必要があると考えている。また、通常の学級において、特別支援学級についての話や、特別支援教育に関する授業をしたりする必要があると考えている。

②交流及び共同学習の実施

- ・通年で交流及び共同学習を行うと決まっている授業はない。

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・N中スタンダードやユニバーサルデザインの取組を通して、すべての生徒に共に学びを高める大切さについて伝えている。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・特に伝えていない。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・特に伝えていない

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・青少年健全育成委員会、民生委員会、学校評議委員、教育委員、PTA総会等で、学校取組について紹介している。

（５）N中学校から学ぶこと

本校では、特別支援教育をすべての学習場面で推進する「N中スタンダード」の取組、さらには一人一人の生徒の学びを保障するため、ユニバーサルデザインの取組を研究テーマに掲げ、校内全体で進めてきた。これにより、一定程度教員の実践が統一され、取組による効果を実感する教員が数多くいた。

【〇高等学校】教育的ニーズのある生徒への理解に基づいた指導・支援に取り組んでいる学校
・生徒数：183名 ・学級数：12学級

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・目指す学校像は、①いじめの無い安心・安全な学校、②わかる授業の実現によって生徒の自信や意欲を育てる学校、③生徒一人一人が輝ける場所や場面のある学校、④生徒の自己実現や進路実現を支援する学校と表記されている。

- ・本年度の留意点は、①組織的・予防的・協力的な対応、②優しさと厳しさのバランスの取れた指導、③特別支援教育の継続と定着、④退学者の減少、⑤内規に則った学校運営と表記されている。
- ・中学校教員・保護者対象の学校説明会資料の中に「〇高等学校はキャリア教育とインクルーシブ教育を実践する学校です」と明記されている。

（２）通常の学級の生徒に対する理解啓発

①特別支援学級や通級指導教室のことを、どのように伝えているか

- ・該当無し

②交流及び共同学習の実施

- ・特記事項なし

③特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えているか

- ・健常の生徒、グレーゾーンの生徒、病弱傾向の生徒、障害受容のない生徒、障害受容のある生徒、など様々な実態や認識を持った生徒が、多数、在籍しているため、特に機会を設ける場面は設けていない。しかし、生徒同士は互いに、辛い過去や困難さを抱えていることを暗黙の了解として共通理解し合い、互いに支えあっているように感じる。
- ・生徒から、自身の悩みや障害等について、教員側に相談があった場合には、親身になって話を聞くとともに、外部専門家（スクールソーシャルワーカー等）と連携して対応するよう心掛けている。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・特に機会を作って、学ぶ場面や伝える場面は設けていない。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・中学校教員・保護者対象の学校説明会で「インクルーシブ教育」を実践する学校と説明している。
- ・文科省の事業の時に、地域の保護者の理解啓発のための講演会を行った。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・中学校教員・保護者対象の学校説明会で「インクルーシブ教育」を実践する学校と説明している。

（５）〇高等学校から学ぶこと

４年ほど前には、生徒の授業に対する意欲が低く、教師の罵声が飛ぶようなこともあったが、今はとても落ち着いた学校になっている。背景に、特別支援の観点を教員が意識したことで、多様な課題を抱えた生徒を見る教職員の目線が変化したこと、さらに、生徒への対応が穏やかになったことが大きいと考える。生徒から授業が分かりやすいという声が出るようになり、教員の生徒理解と理解も基づいた支援が、生徒の意欲に結びついた事例と考えられる。支援ニーズのある生徒が多く在籍していることを教員は理解し、授業での工夫に取り組んでいる。

【P 高等学校】特別支援学校と同一敷地というハード面と交流及び共同学習や学校設定教科の充実というソフト面の両面から共生社会の担い手を育てている学校

・生徒数 629 名 ・通級指導教室：1

（１）学校のグランドデザインにおける特別支援教育の記載

- ・（同一敷地内にある特別支援学校と本校の生徒が）共に助け合って生きていくことを実践的に学ぶ機会を設定し、ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展する礎となる学校を目指す。
- ・その具体的な方法として、交流及び共同学習の充実と学校設定教科「共生社会と人間」「ノーマライゼーション」の展開を挙げている。

（２）生徒に対する理解啓発

①通級指導教室について、どのように伝えているか

- ・「発達障害」「特性」という言葉を使わずに、困難さ、苦手さに対応する場であると説明している。
- ・単位制の学校なので、通級に行っていたとしてもまわりの生徒は気にしていない。
- ・交流及び共同学習が盛んに行われているので、多様性への理解がある。

②交流及び共同学習の実施

- ・同一敷地内にある特別支援学校と日常的に、教科で交流及び共同学習が実施されている。お互いの良さを認め合うことができる。同時に、スポーツ競技等で負ければ、本気で悔しがるなど、対等な人間関係を築くことができる。
- ・交流及び共同学習はもちろん、校内で特別支援学校の生徒と接する機会が多い。
- ・教員も生徒も特別支援学校の生徒に対して「構え」がない。

③特別な支援を必要とする生徒について、どのように伝えているか

- ・直接は説明しないが、同一敷地内の特別支援学校との交流及び共同学習が学びの機会となっている。特別支援学校の生徒の中には、本校の生徒よりも、英語が得意で「ペラペラ」話せる生徒、数学が得意な生徒、高校で習わない漢字が書ける生徒、絵が上手な生徒、音楽が素晴らしい生徒など、多様な生徒がおり、その多様性に触れ、学んでいる。

④障害や障害のある人について、どのように伝えているか

- ・学校設定教科として「共生社会と人間」があり、1 年次の生徒は全員「ノーマライゼーション」を履修する。障害の体験学習や当事者の話、特別支援学校の教師の話を聞くことを通じて、障害についての基礎知識の習得や共生社会を形成していこうとする意欲の高揚を目指している。
- ・同一敷地内の特別支援学校との交流及び共同学習が盛んであり、ともに学びふれあう中で学んでいる。

（３）保護者に対する理解啓発

- ・上記「ノーマライゼーション」の授業の発表会を 2 月に実施しており、保護者にも授業の目的や生徒の学びを知ってもらえる。

- ・通級に関する説明会を行い、だれもが使える場であり、特別なものではないことを伝えている。

（４）地域の方々に対する理解啓発

- ・上記「ノーマライゼーション」の授業に参加してもらったり、発表会に来てもらったりすることで、授業の目的や生徒の学びを知ってもらえる。
- ・特別支援学校と合同で文化祭を実施したところ、千人もの来場者を得た。こうした機会に学校の取組を地域の方々に伝えている。

（５）P 高等学校から学ぶこと

同一敷地内に特別支援学校を併設するというハード面と、共に助け合って生きていくことを実践的に学ぶ機会を設定し、「ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展する礎となる学校を目指す」をミッションに掲げ、交流及び共同学習と学校設定教科に取り組むというソフト面の両面を整え、共生社会の形成に向けた実践を日々行っている高等学校である。生徒はもちろん、教職員も共生社会の担い手として成長し、学びが深化している。

2. 聞き取りの項目毎の結果

(1) 学校のグランドデザインへの記載

質問項目「学校のグランドデザインには、特別な支援を必要とする子どもやその教育について、どのように表現されていますか」に対する回答を整理した。

16 園・校の回答内容を大別すると以下のものであった。

・記載している	13
・学級経営案にはある	1
・記載していない	2

○「記載している」という回答の例

- ・グランドデザインで示した「経営の重点」に「特別支援教育の充実」を位置付け、特別支援教育の組織的な推進を意識した学校経営に取り組んでいる。その内容は、「個々の実態を把握し、それぞれのニーズに対応した教育課程の編成や学習計画を立案し、学習内容の充実を図る。」である。
- ・子どもが安心して学べる学校を目指し、特別支援教育に関わる内容では、インクルーシブ教育のスタンダード化や、学習環境のユニバーサルデザイン化について明記している。

○「記載していない」という回答（いずれも幼稚園）

- ・グランドデザインには、特別支援教育とか、インクルーシブ教育システムという表現は使っていない。幼児教育の基本である「一人一人の子どもを大切にする」という考え方を記している。

(2) 校内研究や校内研修における特別支援教育

質問項目「校内研究や校内研修において、特別な支援を必要とする子どもや特別支援教育に関する内容は実施されていますか」に対する回答を整理した。

16 園・校の回答内容を大別すると以下のものであった。

・実施している	14
・実施していない	2

○「実施している」という回答の例

- ・特別支援学級の授業公開を実施。
- ・特別支援学校教員を講師とし、発達障害の理解に関わる研修である。
- ・市が策定したユニバーサルデザインの取組について、年度当初に校内研修で取り上げている。
- ・授業時間外に教材などを紹介している。計画的にやろうとすると大変なので、不定期で必要だと思った時に実施している。

(3) 通常の学級における特別な支援を必要とする子どもに関する理解啓発

質問項目「通常の学級の中で、特別な支援を必要とする子どもについて、どのように伝えられていますか」に対する回答を整理した。

16 園・校の回答内容を大別すると以下のようになった。

・ 伝えている	7
・ 伝えていないが、知る機会がある	4
・ 伝えていない	5

○「伝えている」という回答の例

- ・ なんで〇〇さんはこうなの？という質問に、きちんと答える。
- ・ 特別支援学級については「みんなと違った方法で、じっくりと勉強をするクラス」、通級指導教室については「一部の学習について、じっくりと勉強をするために利用するクラス」と話している。
- ・ 「ゆっくりわかること」「できないこと」は恥ずかしいことではない、得意・不得意は誰にもある、といったことを担任から伝えている。
- ・ 保護者と相談して話すことのできることを取り、直接言うのではなく、間接的な題材を取り上げて伝える。
- ・ ヒントカードを使いたい生徒がいたら、生徒全員に向かって使っても良いことを伝える。特定の生徒に特化したやり方はしない。

○「伝えていないが、理解する機会がある」という回答の例

- ・ 特に機会を設けていないが、生徒同士は互いに、辛い過去や困難さを抱えていることを暗黙の了解として共通理解し合い、互いに支えあっているように感じる。
- ・ 直接は説明しないが、同一敷地内の特別支援学校との交流及び共同学習が学びの機会となっている。特別支援学校には多様な生徒がおり、その多様性に触れ、学んでいる。

(4) 通常の学級における障害や障害のある人に関する理解啓発

質問項目「通常の学級において、障害や障害のある人について、どのように伝えていきますか」に対する回答を整理した。

16 園・校の回答内容を大別すると以下のものであった。

・ 伝えている	12
・ 伝えていない	4

○「伝えている」という回答の例

- ・ 日々の生活の中や園外保育等で、気付きの機会がある。例えば、車いすに乗っている人や、電車の中でつらそうにしている人を見かけた時、話題にしている。
- ・ 独自に設定した教科（道徳、総合的な学習の時間、学級活動を融合した教科）において、視覚障害や聴覚障害のある方に対し、どんな手伝いができるか等について、子どもたちに話合っている。
- ・ 学校設定教科として「共生社会と人間」があり、1年次の生徒は全員「ノーマライゼーション」を履修する。障害の体験学習や当事者の話、特別支援学校の教師の話聞くことを通じて、障害についての基礎知識の習得や共生社会を形成していこうとする意欲の高揚を目指している。

- ・「みんなちがってみんないい」の活動（障害理解）を通して、だれにも得意なこと、不得意なことがあり、不得意なことへの配慮は特別なものではないことを伝えている
- ・ユニバーサルデザインの視点から、障害のある子どもだけでなく、誰でも苦手なものがあることを伝えている

（５）保護者に対する理解啓発

質問項目「保護者に対して、特別な支援を必要とする子どもやその教育について、どのように伝えていますか」に対する回答を整理した。

16 園・校の回答内容を大別すると以下のようであった。

- ・ 伝えている 13
- ・ 伝えていないが知る機会がある 1
- ・ 伝えていない 2

○「伝えている」という回答の例

- ・（就園時、日常）通級は、だれでも使えるものだということを伝える。
- ・ 入学説明会で、特別支援学級があることや、通常の学級に在籍する児童についても相談にのることなどを周知している。
- ・ 学校だより、人権教育だより、学校Webサイトで発信。
- ・ 学級担任が言いにくいことを、特別支援教育コーディネーターが話をしている。
- ・ 障害のことや特別支援教育についてではなく、子どもの困りを伝えるようにしている。保護者と一緒に考えるという姿勢で。
- ・ 学校説明会で「インクルーシブ教育を実践する学校」と伝えている

○「伝えていないが、知る機会がある」という回答の例

- ・ 読み聞かせに来てくださる保護者やおやじの会活動の保護者たちが、子ども達の様子をよく知って、理解してくれている

（６）地域の人々に対する理解啓発

質問項目「地域の方々に対して、特別な支援を必要とする子どもやその教育について、どのように伝えていますか」に対する回答を整理した。

16 園・校の回答内容を大別すると以下のようであった。

- ・ 伝えている 6
- ・ 伝えていないが知る機会がある 5
- ・ 伝えていない 5

○「伝えている」という回答の例

- ・ 青少年健全育成委員会、民生委員会、学校評議委員等で学校の取組を紹介している。
- ・ 地区の全戸に広報誌を配布し、手をつなぐ育成会の活動に賛助してくれる方を募集している。
- ・ 学校だよりを地域に配布、学校Webサイトで発信。

○「伝えていないが、知る機会がある」という回答の例

- ・お散歩の時に地域の人と子ども達が挨拶を交わす。
- ・行事等で、地域の人に子どもの様子と見てもらう。
- ・ボランティアの方が、子どもの様子を見てくれていて、その子の変化を喜んでくれる。

3. 考 察

グランドデザインへ記載については、幼稚園を除く全ての学校でなされていた。幼稚園は、その教育の本質が特別支援教育とほぼ同一であることから、幼稚園においては敢えて記載しなかったものと考えられる。

特別支援教育の校内研究や校内研修についても、幼稚園を除く全ての学校でなされていた。幼稚園でなされていない理由は、グランドデザインと同じであると考えられる。

特別な支援を必要とする子どもについては、「伝えていないが知る機会がある」を含めると約7割の園・学校で理解啓発をしていた。子どもからの素朴な疑問に適切に答えることを心がけること、特別支援学級など学びの場の役割について伝えること、だれもが支援の対象であり、支援を求めて良いと伝えることなどがあった。いずれも通常の学級の担任に実行可能な伝え方であると考えられる。

障害や障害のある人については、4分の3の園・学校で理解啓発をしていた。子どもたちの気付きに適切に説明を加えること、学校独自の時間として障害について学ぶこと、だれもが支援や配慮の対象になることなどがあった。これらは、通常の学級の担任にも可能かもしれないが、特別支援教育コーディネーターなど専門性を有する教師からの情報提供によってなされたり、学校全体の取組としてなされたりしていると考えられる。

保護者に対しては、「伝えていないが知る機会がある」を含め4分の3の園・学校が理解啓発を行っていた。園や学校行事の機会に伝えたり、学校だよりや学校のWebサイトで発信したりしている学校が見られた。

地域の人々に対しては、「伝えていないが知る機会がある」を含めて約7割の園・学校で理解啓発を行っていた。園や学校を地域に開くことが基本であると考えられた。

今回の調査では、園や学校において、理解啓発が積極的に実施されていることがわかった。今回の調査対象は、教育委員会の推薦によるものだったことがその理由かもしれない。さらに、幅広く情報を集めながら、園や学校における理解啓発の実態や特色ある取組を明らかにしていく必要があると考えられた。そこで、令和元年度に第3章に示す質問調査を実施することとした。

<文 献>

1) 国立特別支援教育総合研究所(2018) 地域実践研究「インクルーシブ教育システムの構築に向けた研修に関する研究」研究成果報告書